



2018年度活動報告 学部授業 : 日本語? ~ ? (西宮上ヶ原)

著者	山本 真理, 森本 郁代, 長谷川 哲子
雑誌名	関西学院大学日本語教育センター紀要
号	8
ページ	96-97
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028130

2018 年度活動報告 学部 授業：日本語Ⅰ～Ⅳ(西宮上ヶ原)

山本 真理 (関西学院大学日本語教育センター)

森本 郁代 (関西学院大学法学部)

長谷川 哲子 (関西学院大学経済学部)

日本語Ⅰ～Ⅳは、西宮上ヶ原キャンパス(神学部、文学部、法学部、社会学部、経済学部、商学部、人間福祉学部、国際学部)の学部留学生を対象とした日本語科目である。履修対象は、日本語Ⅰ・Ⅱが1年、日本語Ⅲ・Ⅳが2年である。科目のローマ数字昇順に先修条件があり、いずれも必修科目として週2コマ開講されている。留学生数の増加に伴い、2018年度は日本語Ⅰ・Ⅱは8クラス、日本語Ⅲ・Ⅳは7クラスとそれぞれ昨年度より1クラスの増加となった。

1. 日本語Ⅰ 授業報告

【水曜授業】

大学のアカデミックライティングで必要とされる基本的なスキルを習得することを目指した。今学期は試みとして、学期前半の3回程度、短い読み物を題材に引用の仕方やレポートの基本的な体裁等を段階的に学ぶ活動を行った。学期中盤以降には、社会の課題を二点扱い、それらの背景や課題の異なる立場の論説文や論文を題材にジグソーリーディングなどを通して読みを深めた。その上で、課題に対する対策法をレポートにまとめた。段階的な活動を取り入れることで、レポート執筆に慣れていない学生でも無理なくレポート執筆に取り組むことができた。

【金曜授業】

大学初年次でのアカデミックな活動に必要とされる口頭表現能力の育成とグループでのスムーズな協働活動を目的とした。今年度は、1)新聞記事の内容の要約とコメントをスライドにまとめて個人で発表する、2)グループでテーマを決定してポスターを裂くし、全クラス合同でのポスターセッションを行う、の2点を主な活動とした。発表の際は1)2)ともに他クラスとの合同セッションとした。大学入学後最初の科目であり、クラス内での学生相互の関係形成に向けた授業活動も今後は取り入れていきたい。

2. 日本語Ⅱ 授業報告

【水曜授業】

日本語Ⅰでアカデミックライティングの基本的なスキルを身に付けたことを前提に、論理的思考力を鍛え、自ら問いを立て論理的な文章を作成できるようになることを目指

した。『日本の教育格差』（橘木俊詔、岩波書店）を課題図書とし、学期前半は丁寧に読みを深める活動に重点を置いた。学期後半は自ら問いを立て、資料収集した上でアウトラインを作成・発表し、3000字程度のレポートを完成させた。ただし、収集した資料の質に課題がある学生もいたため、次年度は授業内で妥当な引用元の検討や、インターネットの利用方法について考えさせる機会を持ちたい。

【金曜授業】

大学でのアカデミックな活動に積極的に参加できるよう、聴解能力、口頭表現能力、さらに論理的思考力や批判的思考能力の涵養を目的とした。学期を通じた活動としてディベートを行った。1学期間をかけてディベートを学ぶことにより、単にディベートのフォーマットだけでなく事前の作業や論理的思考の重要性に気づく学生も多かった。最終成果として、クラス対抗のディベートを実施した。

3. 日本語Ⅲ 授業報告

【水曜授業】

大学でのアカデミックな活動に主体的に参加できるような聴解能力、口頭表現能力を身につけ、ディスカッションのようなグループでの話し合い活動を効果的に運営できることを目的とした。各クラス内でのディスカッションを経て、全クラス共通テーマでクラス混合メンバーでのディスカッションを最終的な活動とした。共通テーマは教員が準備したものをういたが、テーマによっては学生の参加意欲や積極性に差が見られるものもあり、効果的な授業活動に向けた課題となった。

【金曜授業】

新書をテキストとして、LDT話し合い学習法によるピア・リーディング活動を行い、読解力の養成を目指すとともに、知識構成型ジグソー法を用いた対話的学習によってテキストの理解を深める活動を行った。総仕上げとして1500字程度テキスト批評文の作成を通して、意見や批評を書く能力の向上を図った。テキストに対する関心度が授業への参加度に大きく影響したため、テキスト選定が今後の課題である。

4. 日本語Ⅳ 授業報告

テーマを自分で設定し、5000字程度の小論文の作成とプレゼンテーションを行うことで、アカデミックな日本語能力及び論理的思考力、批判的思考力を養うことを目指した。水曜日と金曜日の担当者が連携し、テーマの検討、先行研究の調査、アンケート調査の実施と分析を行い、それを踏まえて小論文を書くまでの各段階を1学期間かけて実施した。社会的に意義のあるテーマに挑戦する意欲的な論文も見られた反面、学生の取り組み度に差があり、水曜日と金曜日の教員の連携のあり方なども課題として残った。